ロールシャッハ・ランキング・テストに関する研究*

名古屋大学

村上英治 江見佳俊**

I

問題の所在

ロールシャッハ・テストのグループ法としては, Harrower, M. R. と Steiner, M. E. のマルチプル・チョイス・メソッド(4) がその代表的なものであり, わが国でも, 高橋(7), 佐竹(6)らの改訂によって, 日本人における標準化の試みが続けられていることはすでに周知の通りである。

この方法はロールシャッハのインク・プロットが何に見えるかを, あらかじめ用意した10個の選択肢の中から選択させるもので, ロールシャッハの原法の繁雑さを簡略化し, 短時間内に多数の被験者に実施可能で, しかも採点が客観的に可能であるという特徴をもっている。

このテスト方法に関しては Jensen, M. B. と Rotter J. B. (5), Wittson, C. L. (9), その他多くの研究者によって検討されているが, 批判的研究も多いので, われわれはこの方法の検討を更に続け, その信頼度と妥当性を高め, 大まかな臨床鑑別に一層有効なものたらしめんとし, Eysenck, H. J. (3) にならっていわゆるランキング・メソッドを試みた。

Eysenck は単にマルチプル・チョイス・メソッドの信頼性を高めるために, ランキング・メソッドとして手続きを変更したのであるが, われわれはなおロールシャッハ法本来のねらいとするところを, あくまでも10枚の個々の刺戟に対して被験者が知覚し, 反応する過程そのものを把握し, 診断していくところにあると考え, たとえグループ法を用いても, そして高橋も指摘する如く, ロールシャッハの原法における理論を, これらグループ法にそのまま適用することは不可能としても, いささかなりとも上述のロールシャッハの原法の本来の意図に近づけるようにすべきだとの観点に立つて, 各インク・プロットに対して用意された各種の反応語を被験者が選択していく過程をより直接的にとらえていこうとした。従ってこの方法では, マルティプル・チョイス・メソッドに

おける如き, 単に被験者が選択した反応語のみをとらえるといった分析方法から, さらに一步すすめて力動的な分析を意図したものである。

本研究においては実験条件に多くの不備があり, 直ちに満足すべき結果は得られなかったし, 今後の検討に待ってべき点も多いが, 一応大まかな臨床鑑別のめやすとしては妥当と思われる結果が得られたので, ここに報告する。

II

テスト方法

1. テスト用紙の構成及び用意した反応の分析

Eysenck の反応構成は Harrower と steiner の著書に掲載されている 300 の反応を基礎としているが, われわれは日本人に対して一応適用可能であり, 臨床に利用できることの実証された高橋の作成になるマルチプル・チョイス・ロールシャッハ・テストより Eysenck にならって, カード I, II, III, IV, VI, VII, IX, X は (I) の反応群, カード V は (V) の反応群, カード VIII は (II) の反応群, を利用した。

高橋の作成になる反応群は上述の Harrower と steiner の文献にみられる 300 の反応を基礎にしているが, その中には日本人に対して不適当と考えられる反応もあり, 大体同程度に日本人に出現した反応に置換したものであるが, これら反応群をランキング・メソッドに使用する場合, スコアリングの都合上, 不適当な反応があるのでわれわれは“何も似たものなし”の反応を除外し, 又そのごく一部を改めた。

反応構成は各カードそれぞれ9個よりなるが, そのうち5個は健康正常人に多く出現する良質の反応(正常反応), 4個は各種の精神疾患群に多い反応(異常反応)である。又各反応には結果の判定を容易ならしめるために類別番号が与えられている。即ち正常反応には1, 2, 3, 4, 5の類別番号が, 異常反応には6, 7, 8, 9の類別番号が与えられる。類別番号はかくの如く反応の質の良否を示すと共に, Table 1 に示す如くロールシャッハ・テストのスコアリングの方法における重要なカテ

* A Study on the Rorschach Ranking Test

** Eiji Murakami and Yoshitoshi Emi (Nagoya University).

Table 1 類別番号の内容

類別番号	内 容
1	人間運動反応 (Rorschach の M)
2	動物反応で運動をとまなつていても、いなくてもよい。多くは平凡反応。
3	比較的良好に答えられる良形体反応。色彩カードでは形体色彩反応 (FC) を表わす。
4	小部分反応。
5	間 隙 反 応。
6	不良形体 (F-) の解剖反応。
7	レントゲン写真。雲。二, 三の不定形の全体反応 (カードⅥの葉, カードⅡの毛皮等)。
8	色彩の爆発的にとび散つたような反応 (CF 又は C)。
9	無彩色カードでは完全に無形の反応。不快な感じの色調を示している (悪夢など)。 色彩カードでは反応のはつきりしないもの、又は色彩の名を挙げたもの。

ゴリーが可能な限り体系的に表わされるように選択されている(4)。

又、各反応の所属する類別番号を示せば、Table 2 の如くで、更に Table 2 より各カード別の類別番号の分布状態を示すと Table 3 のようになる。

2. テストの実施方法及び結果の分析方法

テストの実施方法としては、インク・プロットのスライドを先ず 30秒間暗視野においてスクリーンに映写し、30秒経過した時、スライドは映写したまま室内燈を3分間点燈する。この間に被験者は与えられた反応群に似ている順に1から6までの番号をつけるのであるが、被験者にはその際次のような教示を与える。

「これからインクのしみて出来ているいろいろな形をした10枚の絵を見せます。まず1枚目の絵をよく見て下さい。どの方向から見てもよろしい。

次にカードⅠというところにこちらで今まで多くの人達から得られた答が9つ書きならべてあります。それを一通り読んで下さい。

さてあなただったら、その絵にはどの答えが一番適当している、さるいは一番よく似ていると思うか。それをえらんで、その答の前の()の中に1と記入して下さい。答は各人によってちがうのが当然であって、どれが正しいとかまちがっているかというものではありませんから、自分が一番よく似ていると思うものを選んで下さい。このようにして九つのすべての答に1より9までの番号をつけて下さい。一つでも記入もれないように注意して下さい。

上に述べたような方法で、以下カードⅠからカードⅩまで順次スライドで、写しますから、こちらの指示にしたがつて次々に記入して下さい」

スコアリングの際にはそれぞれ異常反応をランクした番号を総計してスコアとする。従って最も健康な正常

者であれば、理論的にいって各異常反応を6, 7, 8, 9の各番にランクすると考えられ、精神的疾患をもつ異常者は逆にそれらを1, 2, 3, 4の各番にランクすると考えられることから、前者正常者のスコアはそれぞれのカードに $6+7+8+9=30$ 、10枚のカードで $30 \times 10 = 300$ になり、後者異常者では $1+2+3+4=10$ 、総得点は $10 \times 10 = 100$ になるわけである。このようにして極端なものが100と300に位置づけられ、すべての被験者のスコアは理論的には100から300までの間に分布することになる。

III

結果と考察

1. 正常者・精神分裂病患者群・非行少年群のテスト結果の比較検討

本研究で対象とした被験者の構成は Table 4の如くであるが、正常者群は大学生、非行少年群は少年院び少年鑑別所の収容者である。なお精神分裂病患者群の選択に当ってはロボットミー施行患者を除外し、臨床的には、比較的是っきりと精神分裂病と診断された者を選ぶよう努めた。

各被験者のスコアの分布は Fig 1の如くである。各平均スコアは Table 5に示す如くで、非行少年群の平均スコアは他の2群の丁度中間の値を示していることが認められる。正常者群及び精神分裂病患者の男女間にはいずれも有意差は認められないが、三つの被験者群の間にはそれぞれ1%の危険率で有意差を認めることが出来、一応大まかな鑑別診断のめやすとして、このテストは妥当性をもつものと考えられる。

かくの如く正常者と異常者、特に精神分裂病患者を鑑別することは一応可能であるとしても、各被験者群の平均スコアの間に認められたこのような差が一体いかな

Table 2 各反応の類別番号

カード	類別番号	反 応	カード	類別番号	反 応
I	3	学生帽の徽章	II	8	押しつぶされたダニ
	9	くずれた崖		2	二匹の毛深い犬
	2	蝙 蝠		4	両側に小さな顔がある。
	1	二人の人		6	血のついた背骨
	3	骨 盤		5	白 い こ ま
	7	レントゲン写真		8	爆弾の破裂
	4	かにのはさみ		2	二 匹 の 象
	9	汚 物		1	二人の道化役者
	6	体の一部分		9	赤と黒のインク
III	2	二羽の鳥がけんかしている。	IV	4	動 物 の 頭
	8	牛 肉		6	肺
	1	二人の人が何か引つ張り合っている		9	きたないよごれもの
	6	体の中の一部		4	一対の長ぐつ
	9	色のついた汚点だけ		9	もえのこり
	3	赤色の蝶々		1	毛の上衣を着た大男
	8	血痕又はペンキの汚点		3	動物の毛皮
	2	猿がしつぽでぶら下っている		2	大きなゴリラ
	4	赤い蝶ネクタイ		7	レントゲン写真
V	4	わにの頭	VI	3	冠をかむつた二人の王様の顔
	9	押しつぶされた体		7	レントゲン写真
	1	マントを着たダンサー		6	体の一部分
	7	レントゲン写真		3	燈 台
	4	脚		3	毛皮の敷物
	2	蝙蝠又は蝶々		9	泥 水
	6	肩 と 胸		4	みがいた柱
	9	黒 雲		2	海 亀
	4	ピンセット		9	山 崩
VII	7	煙	VIII	3	花 と 葉
	1	二人の女が話をしている		7	レントゲン写真
	6	体の一部分		9	色 の 斑 点
	2	動 物		3	かぶとがに
	5	白いシャンデリア		3	青 い 旗
	9	もえている布片		2	二匹の動物が上っている
	4	羊 の 尾		3	色のついた紋章
	7	レントゲン写真		8	火 と 水
	3	本ばさみ (ブツク・エンド)		6	体の一部分
IX	3	たつのおとし子	X	1	二人の人
	9	ぬりたくつたペンキ		8	とびちつたペンキ
	3	花		3	支那の織物
	6	体の一部分		7	レントゲン写真
	8	煙 と 焰		9	色インクの斑点
	2	鹿又は鹿の角		2	蜘蛛, 毛虫, 昆虫
	1	二人の消防夫が水をかけ合っている		6	内 臓
	8	真 赤 な 雲		3	本州の地図
	3	ローソク		3	花 園

Table 3 各カード別の類別番号の分布

カード 類別番号	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	K	X	計	%
1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	8	8.9
2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	12	13.3
3	2	0	2	1	0	3	1	4	3	3	19	21.1
4	1	1	0	2	3	1	1	0	0	0	9	10.0
5	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2.2
6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	11.1
7	1	0	0	1	1	1	2	1	0	1	8	8.9
8	0	2	2	0	0	0	0	1	2	1	8	8.9
9	2	1	1	2	9	2	1	1	1	1	14	15.6
計	9	9	9	9	2	9	9	9	9	9	90	100.0

Table 4 被験者群の構成

被 験 者 年 令	正常者群			精神分裂病患者群			非 行 少年群
	♂	♀	計	♂	♀	計	
15～19	62	54	116	9	6	15	69
20～24	18	4	22	29	13	42	7
25～29	0	2	2	30	14	44	0
計	80	60	140	68	33	101	76

Table 5 各被験者群の平均スコア

被 験 者 群	性別	平均スコア	標準偏差
正 常 者 群	♂	235.5	21.1
	♀	232.4	21.1
	計	234.2	21.1
精神分裂病患者群	♂	203.2	20.9
	♀	193.1	29.2
	計	199.9	24.1
非行少年群	♂	212.6	26.3

る心理的要因に起因するものであるかという点については、更に検討が進められねばならない。

Wittman はその研究結果より、マルチプル・チョイス・テストは人格統合を表わす 内的適応の型を測定するものとしている。Wittman のいう 人格統合とは個人の 内的適応に作用する如き人格構成要素間の 調和を意味するのであり、彼女によれば適応性に関して消極的、退行的な型を示すものは人格統合が低下欠如したもので、したがってそのテスト結果は貧弱であるが、他方心理学的に適応の代償型をとるものの人格統合は、正常ではないにしても人格統合を欠くものではなく、そのテスト結果もしたがって、正常者とくらべ 弁別しにくいと考えられ

Fig. 1

る(8)。

本研究で異常被験者群として扱った精神分裂病患者と 非行少年とをかくの如き内的適応換言すれば、人格統合という力動的観点よりその相違を考えると、前者ではその葛藤は精神機能の種々の構成部分の間に 退行的な型として示されるものと考えられ、従って Wittman の意味での人格統合はされていないとみるべきであろう。これ

に対し後者における葛藤は主として人格の外界との関係における障害にもとづくもので、内的適応という意味では人格統合を欠くものとはいえない。

かくして本研究の結果において非行少年群の平均スコアが正常者群と精神分裂病患者群の中間の値を示しているということは、上述の Wittman の考えをランキング・メソッドへ適用することの可能性を裏づけるものとも考えられる。しかしこれらの理論的根拠に関してはさらに一層の検討が必要であろう。

2. テストの信頼性の検討

前節においてこのテストは相当の妥当性をもつものであることがわかったが、実際テスト施行場面にあたつてはこれが集団的に一斉に実施されるものであるため、無責任な、でたらめ応答でなされるのではないかとの懸念を抱かされる場合が2, 3見うけられた。したがって、これらのテスト・スコアの信頼性を検討するために中学校第2学年の生徒を対象に3日及び1年の期間をおき再検査法により信頼性係数を求めた。その結果は Table 6 に示すようで、3日間隔及び1年間隔とも危険率1%以下の有意水準で相関があるといえる結果をえ、すくなくとも被験者が無責任にでたらめに応答しているのではなく、そのテスト結果は相当の信頼性をもつものであることが認められた。

3. 年齢及び知的要因のスコアに及ぼす影響

前述 2. の結果は10, 20歳代という大まかな年齢的要

因によつてのみ統制された被験者から得られた結果であるが、年齢及び知的要因がスコアにどのように影響するかをさらに検討するために、中学校第1学年から高等学校第3学年までの335名の生徒にテストを実施し、その結果を検討した。

この考察のために対象とした被験者の内訳は Table 7 の如くであるが、教師に各生徒を総体的学業成績によつて A, B, C の三段階に評価してもらい、この分類結果と年齢を組み合わせ、すべての組合せに関して平均スコアの差を検定した。なお男女間には有意な差のないことはすでにわかっているので、男女間の検定は行っていない。

各被験者群の平均スコアは Table 8 の如くである。平均スコアの差の検定結果によると、中学校の各群の間、中学校と高等学校の各群の間には1%, 又は5%の危険率で有意差のある個所がかなり認められ、高等学校の各群の間では殆んど有意差が認められなかった。

被験者の選択にあつては、その抽出に問題があり、厳密な結論はえがたいが、この結果よりすると高等学校以上の年齢段階になれば、年齢及び知的要因は余りスコアに影響しないものと考えられる。しかし知的要因に関しては別に行つた後述の検討からもみられる如く、まったくその影響を無視するわけにはいかない。

4. テストを構成する各反応の分析

Fig 1 の各被験者群のスコア分布を比較すると、これらのスコア分布間には相当の重複部分のあることが認められるが、かくの如き重複部分を減少させることはテストの弁別精度を高めるために非常に重要である。一般にこの種グループ・テストでは本質的に規準となる集団を用いての項目妥当性にもとづく標準化を必要とするのであり、したがってテストの弁別精度はテストを構成する各反応の弁別精度と直接的に関連するもので、後者

Table 6 再検査法による信頼性係数

再テストまでの期間	被験者数	信頼性係数	C. R.
3日	73	0.84	7.13 > 2.57**
1年	42	0.61	3.91 > 2.59**

** 1%以下の有意水準で相関あり

Table 7 年齢及び知的要因のテスト・スコアへの影響の検討の対象となつた被験者の構成

被験者群	学業成績	♂	♀	計	被験者群	学業成績	♂	♀	計
中学校第一学年	A	8	10	18	高等学校第一学年	A	12	10	22
	B	9	7	16		B	12	11	23
	C	7	8	15		C	8	7	15
〃 第二学年	A	12	10	22	〃 第二学年	A	15	9	24
	B	6	11	17		B	13	12	25
	C	6	8	14		C	15	10	25
〃 第三学年	A	4	13	17	〃 第三学年	A	10	9	19
	B	3	14	17		B	11	9	20
	C	6	10	16		C	5	5	10

Table 8 各被験者群の平均スコア

被 験 者 群		平均スコア	標準偏差
学年段階	学業成績		
中学校 第一学年	A	239.5	32.6
	B	242.3	20.8
	C	222.6	22.7
〃 第二学年	A	239.6	10.2
	B	223.2	21.1
	C	223.8	16.4
〃 第三学年	A	243.5	14.8
	B	229.5	23.0
	C	229.7	29.5
高等学校第一学年	A	240.4	16.6
	B	240.4	20.0
	C	232.5	24.2
〃 第二学年	A	234.7	21.8
	B	244.4	22.4
	C	247.5	16.0
〃 第三学年	A	239.6	21.4
	B	223.7	15.1
	C	228.8	28.5

を満足して初めて前者をも満足せしめるのである。かくの如き観点よりスコア分布間の重複の一つの要因の各反応の弁別精度に求めて、この分析を試みた。

検討の方法は異常反応の場合は、正常者群では各反応を6～9に順位づけたものが多く、異常者群では1～4に順位づけるものが多いという条件を満足しているか否か、正常反応に関しては、この逆の条件を満足しているか否かである。

この検討の結果は Table 9, 10に示す如くで、この二つの条件を同時に満足する反応が非常に少ないことが認められる。このように弁別精度の高い反応が少ないことが、このテストの精度を低くしている一つの原因と考えられるのであるが、かくの如き結果から、テストの弁別精度を高めるためには、反応語の選択に当つて充分の考慮が必要であることが知られた。

さらに又、用意された選択肢のうち被験者が理解不能の反応は直接的、間接的にスコアに影響すると考えられ各反応を似ている順に順位づけた場合、当然あとの方の番号に順位づけられることが予想される。こうした観点より、選択肢の基準設定のための一つの検討として、これらの反応が順位づけにどう影響するかの検討を試みた。この検討のための資料は前述の年齢、及び知的要因

Table 9 正常者群において6～9に順位づけた者が多く、精神分裂病患者群及び非行少年群において1～4に順位づけた者が多い異常反応(*印)

カード	対照被験者群 反 応	正常者群		カード	対照被験者群 反 応	正常者群	
		精神分裂病患者群	非行少年群			精神分裂病患者群	非行少年群
I	くずれた崖 レントゲン写真 汚 物 体の一部分		*	VI	レントゲン写真 体の一部分 泥 水 山 崩	*	*
II	押しつぶされたダニ 血のついた背骨 爆弾の破裂 赤と黒のインク	*	*	VII	煙 体の一部分 もえている布 レントゲン写真	*	
III	牛 肉 体の中の一部分 色のついた汚点だけ 血痕又はペンキの汚点	*	*	VIII	レントゲン写真 色の斑 点 火 と 水 体の一部分	*	*
IV	肺 きたないよごれもの もえのこり レントゲン写真	*		IX	ぬりたくつたペンキ 体の一部分 煙 と 獰 真 赤 な 雲	*	*
V	押しつぶされた体 レントゲン写真 肩 と 胸 黒 雲	*	*	X	とびちつたペンキ レントゲン写真 色インクの斑点 内 臓		

Table 10 正常者群において1～4に順位づけた者が多く精神分裂病患者群及び非行少年群において6～9に順位づけた者が多い正常反応（* 印）

カード	反 応	対照被験者群		カード	反 応	対照被験者群	
		正常者群	正常者群			精神分裂病患者群	非行少年群
I	学生帽の徽章			VI	冠をかむつた二人の王様の頭	*	
	蝙蝠				燈 台	*	
	二人の人				毛皮の敷物		
	骨 盤				みがいた柱		
	かにはさみ				海 亀		
II	二匹の毛深い犬			VII	二人の女が話をしている		
	両側に小さな顔がある	*	*		動 物		
	白 い こま				白いシャンデリア	*	*
	二 匹 の 象				羊 の 尾		
	二人の道化役者				本ばさみ（ブック・エンド）		
III	二羽の鳥がけんかしている			VIII	花 と 葉	*	*
	二人の人が何かを引張り合っている				かぶとがに		
	赤色の蝶々				青 い 旗		
	猿がしつぽでぶら下つている	*			二匹の動物が上つている		
	赤い蝶ネクタイ				色のついた紋章		
IV	動物の頭	*	*	IX	たつのおとし子		
	一對の長ぐつ	*	*		花		
	毛の上着を着た大男	*	*		鹿又は鹿の角	*	*
	動物の毛皮				二人の消防夫が水をかけ合っている		
	大きなゴリラ	*			ローソク		
V	わにの顔	*		X	二人の人	*	*
	マントを着たダンサー				支那の織物	*	*
	脚				蜘蛛、毛虫、昆虫		
	蝙蝠又は蝶々				本州の地図		
	ビンセット				花 園		

のスコアへの影響を調査するために、中学校第1学年より高等学校第3学年までの各学年の生徒にテストを実施した際、合わせて得たものであるが、少なくとも三つの学年以上にわたつて各反応を知らないとするもののいる反応は Table 11 の如くで、全部で 15 反応となつてい

る。又 Table 12 はこれらの反応が実際何番目に順位づけられているかを示すものであるが、明らかに被験者によつて理解されない反応は 後の方の番号へ順位づけられやすい傾向のあることが認められた。これは明らかに知的要因のスコアへの影響の存在を うらづけるものであ

Table 11 三つの学年以上にわたつて各反応を理解不能とする者のいる反応

カ ー ド	反 応
I	骨盤、汚物
II	押しつぶされたダニ、白いこま、二人の道化役者
III	血痕又はペンキの汚点
IV	もえのこり
V	マントを着たダンサー
VI	海 亀
VII	白いシャンデリア、羊の尾、本ばさみ（ブック・エンド）
VIII	かぶとがに
IX	たつのおとし子
X	支那の織物

Table 12 テスト用紙の各反応を知らないとした被験者が各反応を順位づけた番号別の被験者の%

順位づけた番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
中 学 校 第一学年	0	1.9	1.9	1.9	9.4	3.8	7.5	11.3	62.3
〃 第二学年	2.4	2.4	9.4	8.6	7.8	10.9	10.2	14.1	34.4
〃 第三学年	3.6	0	3.6	14.3	7.1	14.3	10.7	7.1	35.7
高等学校 第一学年	2.1	2.1	6.3	4.3	4.3	4.3	10.6	14.9	51.1
〃 第二学年	0	0	0	0	0	6.3	12.5	6.3	75.0
〃 第三学年	0	3.2	3.2	3.2	0	12.9	3.2	9.6	64.5

り、知的に劣つた被験者にもテスト可能ならしめるためには、これら諸反応を除去することが望ましい。

VI

要 約

(1) ロールシャッハ・テストのグループ法としては、Harrower, M. R. と Steiner, M. E. のマルチプル・チョイス・メソッドが代表的であるが、批判的研究も多いので、Eysenck, H. J. にしたがひ、ランキング・メソッドを試みた。被験者群は正常者群、精神分裂病患者群及び非行少年群であるが、各被験者群の平均スコアの間にはそれぞれ1%の危険率で有意差を認めることができ、このテストが一応大まかな臨床鑑別のめやすとして妥当なものであることが理解された。

(2) テストの信頼性を検討するため、3日間隔、1年間隔で再検査を試み、信頼性係数を求めたところ、いずれの場合も危険率1%以下の有意水準で相関があるという結果を得、被験者より得られた反応はでたらめ応答でなく、相当の信頼性をもつものであることが認められた。

(3) 上述(1)の結果は、10、20歳代という大まかな年齢的要因によつてのみ統制された被験者より得られた結果であるので、年齢、知的両要因のテスト・スコアへの影響を検討するため中学校、高等学校の生徒335名についての結果を考察したところ、高等学校以上の年齢段階では年齢、知的両要因は余りテスト・スコアに影響しないと考えられる結果を得た。

(4) 正常者群、精神分裂病患者群、非行少年群のテスト・スコアの分布を比較すると、かなりの重複部分のあることが認められるが、かくの如き重複部分を減少させ、テストの妥当性を高めるためには、各反応の弁別能力を検討する必要があると考え、検討したところ、弁別能力をもつ反応が非常に少ないことが認められた。

さらに被験者によつて理解されない反応は、それらを似ている順に順位づけた場合、後の方の番号に順位づけられ、テスト・スコアに影響すると予想し、検討した

結果、やはりこのような反応は後の方の番号へ順位づけられやすい傾向のあることが認められ、テストの反応構成にかなりの問題のあることが理解された。したがつてこれらの不適当な反応を除外して、より弁別度の高い妥当な反応とさしかえることが、今後これらのテストを臨床的にいよいよ有効ならしめるためには必要のように思われる。

付記 本論文は江見が昭和29年度名古屋大学教育学部卒業論文として提出したものにもとづき、村上が研究主題とする「診断テストとしてのロールシャッハ法」研究のための、側面からのアプローチとして、以後村上と共同して検討を進めたものである。

研究にあたつていろいろ御指導をいただいた堺脳病院高橋、長坂両博士、名古屋大学教育学部教育心理学教室諸先生、ならびに実験の便宜を与えていただいた関係各位に深い感謝をさしあげる。

文 献

- 1) Abt, L. E., & Bellak, L.; Projective Psychology. 1950.
- 2) Bell, J. E.; Projective Technique. 1951.
- 3) Eysenck, H. J.; A Comparative study of Four Screening test for Neurotics. *Psychol. Bull.* 42: 9; 659—662, 1945.
- 4) Harrower, M. R., & steiner, M. E.; Large Scale Rorschach Techniques. 1945.
- 5) Jensen, M. B., & Rotter, J. B.; The validity of the multiple choice Rorschach test in officer candidate selection. *Psychol. Bull.*, 42: 3 182—185, 1945.
- 6) 佐竹隆三・多田治夫・田中富士夫・酒川靖一郎; 集団ロールシャッハの研究 (I) (II) (III), 日本心理学会第20回大会報告, 1956, その他.
- 7) 高橋清彦; 集団ロールシャッハテストに関する研究, 精神神経学雑誌, 55: 9, 1954.
- 8) Wittman, P.; The use of the multiple-choice Rorschach as a differential diagnostic tool. *J. Clin. Psychol.*, 1: 4; 281—287, 1954.
- 9) Wittson, C. L., Hunt, W. A., & Older, H. J.; The use of the multiple choice group Rorschach test in military screening. *J. Psychol.*, 17: 91—94, 1944.